

杲宝撰『菩提心論聞書』考

千 葉 正

本稿は、十四世紀の真言宗の学匠、杲宝（一三〇六一—一三六二）の著述である『菩提心論聞書』全七卷（本稿では『真言宗全書』第八卷所収の版を用いる）の内容を検証しつつ、杲宝教学の体系の一端を明らかにすることを目的とする。それでは、この杲宝教学の特色とは、筆者がこれまでに検証してきた結果として、まず『大日経』の教主論、禅宗批判、宋代密教の受容、台密批判、本地垂迹説（両部神道）の受容、及び持戒清浄印明の伝授ということであった。そして本稿で取り上げる『菩提心論聞書』においても、前述した杲宝教学の特色の一端が看取できるのである。従って本稿では紙幅の制限上、この『聞書』（以降『聞書』と略す）に見られる、杲宝教学の特色の中から、禅宗批判と持戒清浄印明の伝授という二点に絞って検証してみたいと思う。そこで本稿ではまず『聞書』の成立年代、内容、構成を略述し、作者の問題に若干触れ、そして検証作業を行うという順序で進めていきたい。

それではこの『聞書』の成立年代と内容、構成を簡略に述

べてみる。まず、題号が示すように、この『聞書』は真言宗で重視する、所謂『十卷章』の中の一つとして知られる、龍猛造・不空訳『菩提心論』に対する註釈書である。次に成立年代である。成立年代については全七巻のそれぞれの巻の口書に記されていて、その箇所より見れば、貞和四年（一三四年）十二月より同五年（一三四年）十二月にかけて東寺勸学会恒例談義において杲宝が講じた所の聞書であることが分かる。続いて内容、構成を略述してみる。まず、全七巻の第一巻においては、龍猛菩薩千部論事、千部論中以_二当論釈論_一為_二真言所學論藏_一事、二部十一巻中以_二当論_一為_二密藏肝心論_一事、当論集義釈經分別事、当論両部撰屬事、題号釈・金剛釈事、菩提心法体事、論得名事、一經一論安_二三題_一例証事、龍猛之名号梵漢事、龍樹得名事、龍猛得名事、当論所造縁起事、龍猛菩薩出世時代事_註造論時代、訳号釈事の以上、十六項目について解釈して述べられている。以下、第二巻より第七巻までは『菩提心論』本文に対する註釈となっている。そして第

一卷を同様な項目が立てられていて、合計九十五ヶ条から成っている。また、参考になっている典籍については、直接に『菩提心論』の他の註釈書として遍満、真頂、濟暹、実範、覺鑊等の書を引用し、また、頼瑜、道範、信日、我宝、頼宝、覺濟、安然等の説も引用している。以上が内容と構成である。

さて、具体的な本文の検証に入る前に、この『聞書』の作者の問題について若干触れてみたいと思う。この問題は『聞書』巻第七の奥書に次のように記されている。

本云

貞和五年十二月二十日結願了。至三摩地段^ノ者説^レ雜秘密事^ノ間略^之。凡上来所^レ書之功德法門於^三之八九^ノ者雖^レ違^レ文理^一。至^三万之一毛^ノ者可^レ會^レ論宗^一唯願以^レ此功德^一一切衆生同可^レ証^レ菩提^一極果^一。

とだけあつて、記者名は不明である。つまり杲宝撰とあるが、秘密には杲宝が講じたものを聴衆の一人が筆録した書である。さらに各巻の処々に「読師、料簡云」、あるいは「読師、義云」などあつて、このことから見ても杲宝自ら執筆したものではないということになる。杲宝の他の著述の中にも、このような聞書の形式をとるものが多いのである。従つて杲宝だけでなく、筆録者の感想も混じつてしまうという問題が残つてしまうことにもなる。以上で作者の問題の考察を了えることにして、具体的な内容の検証に移りたいと思う。

杲宝撰『菩提心論聞書』考(千葉)

まず、前述したように「禪宗批判」に関する箇所を検証してみることにする。この禪宗批判の問題については、筆者がこれまで考察して判明した結果として、杲宝教学の中でも非常に特異な位置を占めている。それは杲宝の著述の一つとして「開心抄」全三巻という書があり、その全三巻中「上巻」において禪宗批判が行われているのである。筆者はその『開心抄』上巻を詳細に検討した結果、杲宝の禪宗批判の内容は西天二十八祖説批判、密禪併修説への批判が中心となつていたのである。

では、この『聞書』においての禪宗に対する杲宝の見解はどのような内容であるのか。それは『聞書』巻第二に見られる。その巻第二において「菩提心論」本文の、「惟^レ真言法^一中^ニ即身成仏^{スル}ガ故^ニ是^レ説^ク三摩地^ノ法^ヲ於^テ諸教^ノ中^ニ闕^シテ不^レ書^セ」(『真言宗全書』八、一三三下)という箇所に対しての註釈部分に説かれている。そして、この箇所に引かれる『菩提心論』の文は空海の『即身成仏義』と『弁頭密二教論』に引用されている。従つて真言密教にとつて、非常に重要な即身成仏説についての内容を含んでいる部分ということになる。それでは、杲宝は、この『菩提心論』の文に対してどのように禪宗を結び付けて、註釈を行っているのであらうか。それは次のような問答に見ることが出来る。まず、問いの部分で、問。下文又乘^三散善門中^ニ經^三三無教劫^一爾者頭教^ノ散善門也。今、

是説三摩地法文爾者真言ハニ摩地宗ナレガ故ニ定善也。此ノ分別ノ曲如何。御請来録三云。修定多途ニ有レ遲有レ速。甄ハ一心ノ利刀ヲ顯教。揮ハ三密金剛ヲ密藏ナリ若シ此ノ釈ヲ於ニ修定ニ顯密ノ二ツ見テ爾者如何〔真言宗全書〕八、一三四下)

と尋ねている。これは、顯教を散善門に位置付け、さらに禪定の修め方に顯教と密教との優劣を付けようとする空海以来の伝統的な真言密教の立場からの問いである。この問いに対する答えの中に禪宗への対応が、次のように説かれる。

答。顯教修定ト者一心利刀ノ位也。假令心性ノ不生不滅非青非黃無色無形ナ。心性ノ空寂不生ノ処ヲ為レ定。是レ禪門ニ定ニ本分田地一。天台華嚴所レ宗トスル也。是レ則一分修定ヲルガ故ニ大師ハ入ニ修定ノ中一。今真言教ニハ此ノ位ヲ無識心三昧ノ位ニシテ。未レ至ニ金剛五相ノ觀門ニ。今初入ニ五相ノ觀ニ。是レ真定也。仍テ於ニ當宗ニ隨テ分ニ離レ修レ定。未レ入ニ五相ノ觀ニ散善也。〔真言宗全書〕八、一三四下)

ここでの論旨は、まず禪宗の本分田地という境界が華嚴や天台の修める所の禪定と変わるものではないと述べている。続いて真言密教の五相成身觀、及び無識心(身)三昧の境界には禪宗の本分田地は及ばないと説いて、真言密教の優位性を示している。従つて、ここでは、杲宝は禪宗を散善門にあるとして、あくまでも顯教の立場に位置付けようとしているのである。つまり、これは日本の禪宗(特に臨濟禪)の「密禪併修説」(夢窓疎石や虎関師鍊の禪風)に対する批判ということ

になるであろう。

次に「持戒清淨印明」に関連する記事を検証してみたいと思う。

この持戒清淨印明とは高山寺の明恵上人(二七三—二三三)が文殊菩薩の影向を感得して、持戒清淨の印明を授かつたという伝説から始まつて、代々伝授され各地に拡まつていつた印明のことなのである。そして高山寺に残されている持戒清淨印明の血脈(2)の中に杲宝の名が記されている。また、この高山寺に残されている血脈だけではなく、杲宝と持戒清淨印明との關係を筆者は、杲宝が著した『二教論研覈抄』の中に見出すことが出来たのである。それは『二教論研覈抄』巻第五に「淨光明寺長老」という人物の説が引用されていたからなのである。この淨光明寺とは鎌倉に在る諸行本願義系の淨土宗寺院である。その第三世の高慧(二二八四—一三三八)が持戒清淨印明を称名寺の湛睿(二二七一—一三四六)より授けられているということなのである。そして、この高慧によつて淨光明寺は淨土、密教、律、華嚴の四宗兼学の寺院となつていくことになる。そこで前の高山寺の血脈によれば、高慧は円慧という人物にこの持戒清淨印明を授けている。この円慧は杲宝の兄と伝えられている。従つて杲宝と淨光明寺との關係は深いものと言えよう。それではこの『聞書』における持戒清淨印明との關係を検証してみる。それは『聞書』巻第

六にある『菩提心論』の、「能_レ從_レ凡入_ニ仏位_ニ者_{ナリ}。亦超_テ十地_ノ菩薩_ノ境界_ヲ」(『真言宗全書』八、一九六下)という文に対する註釈部分に記されている。ここでは、「從凡入_ニ仏位者_{ナリ}。」という箇所が、重要な意味を持つている。つまり、ここには凡夫の位のまま、仏位に入るといふ即身成仏思想が見て取れるのである。従つてこの箇所に対する註釈に力が払われているということにもなる。それでは「持戒清淨印明」に関わる箇所を見てみる。

出生義云。削_テ地位_ヲ漸階_ヲ開_テ。白妙頓旨_ヲ常_ニ義_ニハ等妙頓旨_ヲ指_ニ等妙_ニ二覺_ニ白毫院_ニ円光坊_ニ義_ニハ指_ニ妙覺_ヲ妙覺_ヲ鼓云_ニ等妙頓旨_ヲ。妙覺_ヲ云_ニ無_ニ上_ニ正_ニ正_ニ覺_ニ故也。是_レ猶生_レ仏_ノ中間_ニ不_レ置_レ位_ヲ意示_レ之_ヲ也。
是_レ名_ヲ從凡入_レ仏位_ヲ大宗_ト也(『真言宗全書』八、一九六下—一九七上)

ここでは波線部に示されている白毫院円光坊という人物が、この持戒清淨印明に関わるのである。まず、この白毫院とは京都東山の太子堂白毫院(西大寺系の寺院)の⁵⁾ことを指す。そして円光坊と良舎(二二七四—?)のことである。そして、この良舎は、多くの持戒清淨印明の血脈に名を列ねていることが判明している。つまり杲宝は『聞書』において、この円光坊の説を重視していることが言える。それは、直前に引用している。『出生義』(『金剛頂瑜迦三十七尊出生義』)が真言密教で重視する典籍の一つであるからである。従つて、杲宝と

持戒清淨印明との関係が、この箇所からも再確認することができよう。

以上で『菩提心論聞書』の中より、禅宗批判と持戒清淨印明との関係についての検証を了えることにしたい。

1 『真言宗全書』八、二二一頁上

2 田中久夫「持戒清淨印明について」(一) — (三)『金沢文庫研究』通卷二九号—二二一号

3 拙稿「杲宝撰『二教論研覈抄』考」(駒沢大学大学院仏教学研究會年報』第三二号所収)

4 納富常天「金沢文庫資料の研究」第一編東国仏教と金沢文庫、鎌倉における華嚴教学—金沢文庫資料を中心として—を参照。

5 同上「金沢文庫資料の研究稀覯資料篇6」東山太子堂白毫寺と忍性供養塔」を参照。

(キーワード) 杲宝、『菩提心論聞書』、本分田地、持戒清淨印明、太子堂白毫寺、良舎 (駒沢大学大学院)